

実践報告

文理・異文化融合課題解決型グローバル人材育成プログラムが参加学生の
進路検討に与える効果

(カップリング・インターンシップ参加学生の進路追跡調査より)

橋本 智恵^A、勝又 美穂子^A、西川 宏^A、近藤 勝義^AThe Effects of Practical Internship on Participants' Career Considerations
(From a Follow-up Survey of CIS Participants Who Graduated from Osaka University)Chie HASHIMOTO^A, Mihoko KATSUMATA^A, Hiroshi NISHIKAWA^A,
Katsuyoshi KONDOH^A

Abstract: Since 2015, Osaka University has had a practical internship called the Coupling Internship(CIS), which is supported by the Japanese Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. CIS is conducted with mixed participants from Osaka University and overseas universities from both humanities and engineering majors. During the 2-week-long group internship at a Japanese manufacturing firm, students with diverse backgrounds work together to propose findings and solutions to the firm's problems. 164 students of Osaka University have completed the CIS so far. This paper attempts to find the effects of the CIS experience on participants' career considerations, based on the responses to a follow-up survey of CIS participants who graduated from Osaka University. The results show that both Humanities and Engineering students enjoyed positive effects but that the type of effect tend to differ between the two: the biggest impact on Engineering students was an expansion of the career paths they considered to include international options while, for the Humanities students, it was self-understanding.

Keywords: Coupling Internship, humanities and engineering students, follow-up survey, global-mindness, self-understanding

キーワード：カップリング・インターンシップ、文理学生、追跡調査、海外志向、自己理解

1 はじめに

カップリング・インターンシップ(以下、CIS)は、大阪大学接合科学研究所が中心となり文部科学省特別経費「広域アジアものづくり技術・人材高度化拠点形成事業」の一環として2013年度から開始し、2020年度で8年目を迎えた。CISは時代の変化とニーズに対応したグローバル人材育成を目的とし、日本・海外、文系・理系が融合し、課題解決力や異文化理解、コミュニケーション能力の向上を目指す実践型の海外・国内研修である。これまでフェーズI(2013年度～2017年度)、フェーズII(2018年度～)を合わせ2019年

度までに計41回実施し、本学の参加学生総数は164名である。CISは各実施箇所につき、本学学生4名、海外連携大学学生4名が参加し、受入企業から提示された実習課題に本学学生と海外学生、文系理系学生の1チーム4名の混合チームで取り組み、対策の提案を行う¹⁾。本学の参加学生は、文系は外国語学部(フェーズI～)、経済学部・経済学研究科(フェーズII～)、理系は工学研究科(フェーズI～)、基礎工学研究科(フェーズII～)に在籍する学部生と大学院生で構成されている。前述のとおり本研修は「課題解決力や異文化理解、コミュニケーション能力の向上」を目的としており、「専門分野の技術習得や知識習得」が主目的ではないことから、本研修においては、学部生と大学院生

A: 大阪大学接合科学研究所

の区別はせず、参加者は全て「学生」とし、上記の文系学部及び研究科、理系研究科に在籍する学生をそれぞれ「文系学生、理系学生」としている。加えて、本研修におけるキャリア教育の観点から、参加対象は就職に近い学年に設定している。文系は博士課程へ進学する学部生が非常に少なく、他方、理系は博士課程へ進学する学部生が多いため、文系は主に学部生、理系は大学院生が参加している。本研修の成果については、異分野融合・産学連携による学生の学び¹⁾や文理学生の協働を通して双方に与える学び²⁾において検証を行ってきた。本研修では期待される効果の一つとして、学生のキャリア意識向上を挙げており、本稿では、本研修の経験が参加学生の進路検討へ与える効果を進路追跡調査をもとに明らかにすることを目的とする。

2 カップリング・インターンシップ (CIS) の概要

2.1 全体概要

CIS 現地実習までに、本学学生に向け日本企業の経営理念やものづくり企業について、実習課題への取り組み方、コミュニケーションと異文化理解、危機管理等計9回の事前研修を実施し、研修本番に向けた準備を進める。実習課題は、事前に受入企業と本学で協議の上設定され、文理学生が共に理解可能であり協議できるもの、またそれぞれの強みが活かせるテーマとなっている。本学での事前研修終了後、各実施箇所では2週間の現地実習が始まり、本学学生と海外学生が合流し最初の2日間現地事前研修が実施される。その後、日系ものづくり企業で工場見学、技術講義、技能実習、社員へのインタビュー等の企業実習を5日間行う。学生は、企業実習でものづくり企業への理解を深めるとともに、課題取り組みの情報収集に努める。そして、連日の実習課題に対するチーム協議や文化体験を通じ学生同士の絆を深めていく。本研修最終日には、受入企業、海外連携大学と本学関係者、学生が参加する最終報告会が開催され、学生が各々のチームの実習課題の課題と対策を英語で発表し、報告会参加者からは発表内容に対する質問やコメントが出される。本研修が終了すると、参加学生は各自「成果報告書」と「実施後アンケート」を作成し内省する³⁾。

2.2 企業実習

本稿では、企業実習の経験が参加学生の進路検討へ影響を与える大きな要因であると考察する。企業実習は、2週間のCIS実習のうち5日間日系ものづくり企業にて実施される。受入企業での実習カリキュラムは本学と受入企業との協議の上設定され、カリキュラム内容は主に企業・組織紹介、安全講習、工場見学、技術講義、溶接等の技能実習、顧客訪問や現場視察、社長や工場長をはじめとする社員へのインタビューである。企業・組織紹介では、企業沿革、企業理念、事業内容、組織について説明が行われる。工場見学では、製造工程から出荷前までの一連の流れを見学するため、ものづくり現場を実際に体感することができる。また工場内では社員の働く様子や安全性、労働環境、業務の効率化等における企業の取り組みも見ることができる。顧客訪問や現場視察では、工場で製造プロセスを見学した製品が出荷後どのように活用されているのかを見る機会となる。また、企業実習カリキュラムにはインタビューの時間が多く設定されており、社長や工場長をはじめとし、部長・課長クラス、リーダークラス、ワーカークラス、日本人駐在員、現地社員等、様々な職位の社員へヒアリングを行う。学生は、インタビューを通じ、課題発見のための情報収集を行うと同時に、社員の業務内容や責務、組織マネジメント等をより詳細に理解していく。そして、企業実習期間中には、受入企業社員との懇親会も開催され、参加学生と社長や工場長を含めた社員との交流の場となっている。企業実習は、グローバルに展開する日系ものづくり企業の様々な企業活動や日本の技術力を間近で体感し、ものづくり業界への理解を深めると共に、グローバル環境で働く日本人の任務や責務、苦悩ややりがい等について具体的に知る機会となっている。

3 アンケート調査

CISの経験が進路検討へ与える影響を調べるため、以下2つのアンケート調査を実施した。

3.1 CIS参加学生の進路追跡調査（以下進路調査アンケート）

【調査目的と内容】

CIS参加学生の卒業後の進路先とCISの経験が進路検討に影響を与えていたかを探るためアンケート調

査を実施した。進路検討時における CIS の影響の有無については「CIS の経験が進路検討に役立ったか」の問いに「非常に役立った」「一部役立った」「ほとんど役立たなかった」「全く役立たなかった」の中から選択してもらい、「非常に役立った」「一部役立った」を選択した場合は、「何がどのように役立ったか」を自由記述にて回答を求めた。

【調査対象】

2013 年度～2018 年度に CIS に参加した卒業生 110 名 (文系学生：外国語学部 52 名、経済学研究科 1 名、理系学生：工学研究科 57 名)。回答者 74 名 (文系学生：外国語学部 36 名、理系学生：工学研究科 38 名)

【調査時期】

2019 年 2 月～4 月

【調査実施方法】

E メールで質問票を送付

3.2. CIS 未経験者の海外志向と就業意識に関するアンケート調査 (以下 CIS 未経験者アンケート)

【調査目的と内容】

進路調査アンケートの結果と比較分析するため、CIS 未経験者へアンケート調査を実施した。アンケート項目は就業意識、海外志向、ものづくり業界への関心、グローバル人材像、自信のカテゴリーに分け設定しそれぞれの問いに 5 段階で評価してもらった。その中から「外国人と活動したり外国語を使うようなインターンシップに参加したことがあるか」「将来どんな職業につきたいか明確か」「将来どんな業界で働きたいか明確か」「ものづくり業界について知っているか」「ものづくり業界に興味があるか」「将来海外勤務の可能性のある企業やグローバルに展開している企業で働きたいと思うか」「海外勤務やグローバル企業で働くことに対し不安があるか」「どのような不安があるか」の問いに対する回答結果を分析対象データとする。

【調査対象】

CIS 未経験の大阪大学学生計 46 名。対象内訳を表 1 に示す。CIS への参加要件にあてはまる研究科、学部、学年を対象とする。B は学部課程、M は博士課程であり、学年と合わせて記載している。B4、M2 は CIS 参加要件にあてはまる就職活動が完了している可能性が高いことから調査対象としない。

表 1 CIS 未経験者アンケート回答者内訳

文系 (23 名)		理系 (23 名)		
経済学研究科	外国語学部	工学研究科	基礎工学研究科	
M1	B3	B2	M1	
1 名	8 名	14 名	16 名	7 名

【調査方法】

オンラインアンケート (無記名)

4 調査結果

4.1 文理の進路検討に与える影響の差異

進路調査アンケートで「CIS が進路検討に役立ったか」という問いに対し「非常に役立った」「一部役立った」と回答した学生は、文系 33 名 (91%)、理系 32 名 (84%)、文理合わせて 63 名 (88%) であった (図 1)。文理共に多くの参加学生が CIS の経験が進路検討に役立ったと回答した。

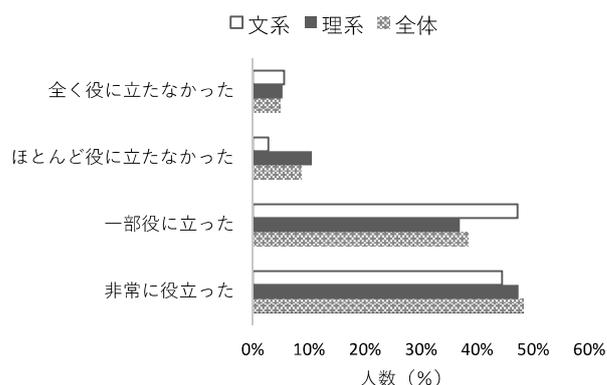


図 1 CIS の経験が進路検討に役立ったか。
(進路調査アンケート)

「非常に役立った」「一部役立った」と回答した文理学生 63 名の「何がどのように進路検討に役立ったか」の問いに対する自由記述回答を表 2 の分類基準をもとにカテゴリー分類した。分類基準は語や文章記述の類似性、コンテキスト、記述全体の意味から同一概念を抽出し作成した。1 名の回答が複数のカテゴリーに含まれることがあり、それぞれカウントしている。その結果、文系学生、理系学生の進路検討に与えた影響に異なる傾向があることがわかった (図 2)。

表2 「何がどのように進路検討に役立ったか」の回答カテゴリー分類

カテゴリー項目	分類基準
業種理解	ものづくり業界・企業組織・企業活動・職務の理解
自己理解	自己に対する新しい気づきや認識(興味・関心・能力・価値観等)、職業への興味、進路の明確化
海外志向の向上	海外やグローバル企業でのキャリア検討、海外への不安軽減
就業・職業意識の変容	働くことや仕事に対するイメージ形成、働くことの面白さや難しさを理解
その他	意味を明確に理解できない、上記にカテゴリーできない回答

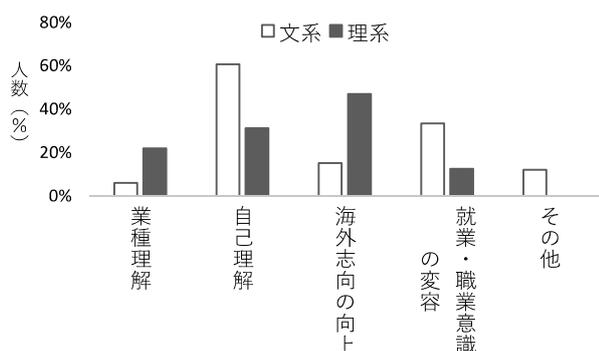


図2 何がどのように進路検討に役立ったか。(進路調査アンケート)

進路検討に最も影響を与えた項目は、文系学生は「自己理解」、理系学生は「海外志向の向上」であった。最も影響を与えた項目に違いが出た要因は、文理の専門性による進路の明確度の差異が背景にあると考える。文系学生は、専門性による業種職種の限定が少ないことから、幅広い進路選択が可能となる。キャリア検討開始時や業種職種の選択時に、自己の興味や関心、職業適性の認識等の自己分析が不可欠なことから、自己理解へ最も影響を与えたと考える。加えて、2013年度から2018年度に参加した文系学生はほぼ全員が外国語学部所属であり、進路調査アンケートの文系回答者も全員外国語学部生であったことから、本研修に参加する前から海外志向は高かったと推測する。理系学生

は、専門性が高く進路の業種職種が限定されているため、自己理解よりも海外志向へ影響があったと思われる。

図3はCIS未経験者アンケート結果である。アンケート回答者はB2も含まれるが、CIS参加対象学年に該当するため、サンプルに含んでいる。「将来どんな業界で働きたいか明確か」の問いに対し、文系学生は「明確」「やや明確」が計12名(52%)で「とても明確」はいなかった。理系学生は「とても明確」「明確」「やや明確」は計19名(83%)であった。

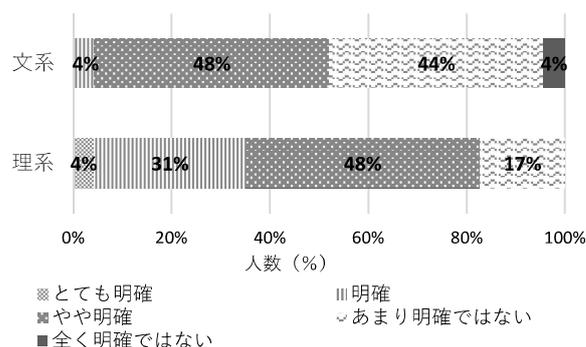


図3 将来どんな業界で働きたいか明確か。(CIS未経験者アンケート)

また、「将来どんな職業に就きたいか明確か」の問いに、文系学生は「明確」「やや明確」が計9名(39%)、理系学生は計19名(87%)であり(図4)、理系学生の方が自己の将来の職業に対する明確度が高かった。

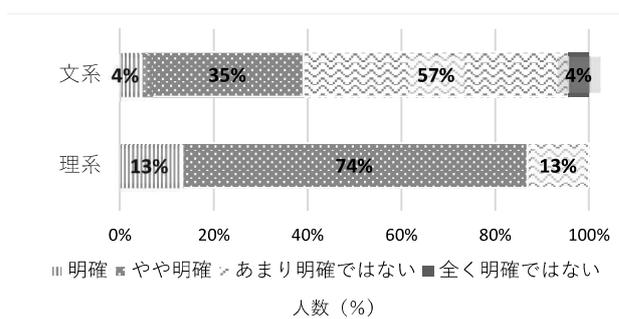


図4 将来どんな職業に就きたいか明確か。(CIS未経験者アンケート)

これらの結果から、進路の明確度が文系学生と理系学生とで異なる傾向があることがわかった。専門性による進路の明確度の差異により、本研修の経験が進路検討に最も影響を与えた項目に異なった傾向が表れたと考える。

4.2 理系学生の進路検討への影響

4.2.1 コミュニケーション力や英語力における自己効力感の向上が進路検討に与える影響

本稿では、体験による「自分でもできそうだ」という個人の自信・確信を自己効力感と示す。進路調査アンケートで「何がどのように役立ったのか」の問いに対する理系学生の自由記述回答をカテゴリー分類した結果、「海外志向の向上」が最も多かった(図2)。回答には「海外で働くことに興味を持った」「海外勤務の可能性が高い企業を優先し、就職活動を行った」など海外勤務への興味やグローバル企業や海外勤務の可能性のある企業への就職活動を行ったという記述内容が多く見られた。理系学生の海外志向が向上した要因を探るため、CIS 未経験者アンケートの理系学生の回答結果(図5~8)を参照した。まず、「将来海外勤務の可能性のある企業やグローバルに展開している企業で働きたいか」の問いに対し、「とても思う」「思う」「やや思う」と回答した理系学生は計16名(70%)であり(図5)、多くの理系学生が、海外勤務がある企業やグローバルに展開している企業への就職を希望していることがわかった。次に、「海外勤務やグローバル企業で働くことに対して不安があるか」の問いに対し、「とてもある」「ある」「少しある」と回答した学生は計18名(78%)であり(図6)、多くの理系学生が不安を抱えていることがわかった。

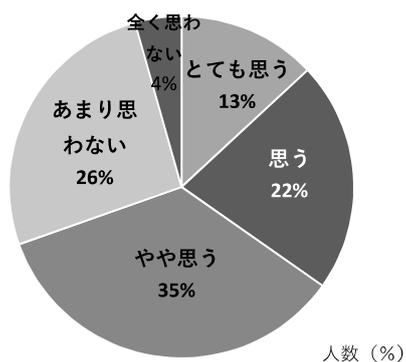


図5 将来海外勤務の可能性のある企業やグローバルに展開している企業で働きたいか。
理系学生回答 (CIS 未経験者アンケート)

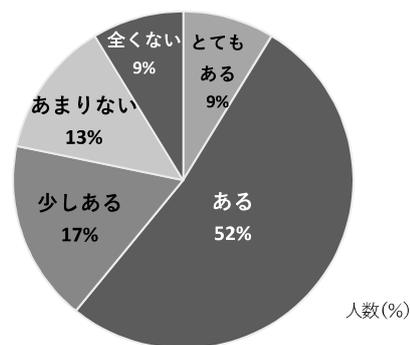


図6 海外勤務やグローバル企業で働くことに対して不安があるか。理系学生回答 (CIS 未経験者アンケート)

そして、学生が海外勤務やグローバル企業で働くことに対しどのような不安を抱えているのか質問したところ、最も多かった回答は、「自分の語学力やコミュニケーション力」であった(図7)。

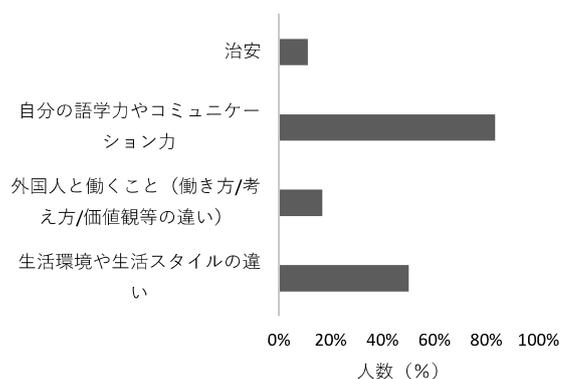


図7 どのような不安があるか。
理系学生回答 (CIS 未経験者アンケート)

この結果から、CIS 未経験の本学理系学生の傾向として海外志向はあるものの、外国人と活動したり外国語を使うようなインターンシップ参加経験はほとんど無く(図8)、自己のコミュニケーション力や英語力に不安を感じていることから、海外勤務やグローバル企業で働くことにも不安を感じていることがわかった。

これらの結果から、CIS 参加理系学生の「海外志向の向上」は、本研修を通じコミュニケーション力や英語力の不安を払拭したことが大きな要因であると思われる。

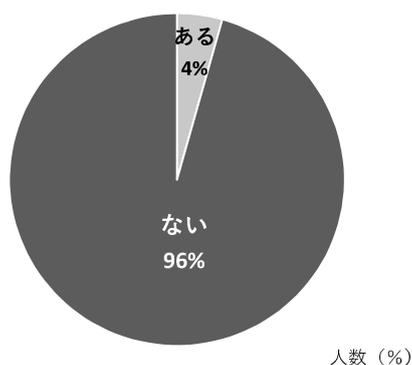


図8 外国人と活動したり外国語を使うようなインターンシップに参加したことがあるか。
理系学生回答 (CIS 未経験者アンケート)

そこで、前述の CIS に参加した本学卒業生への進路調査アンケート、CIS 未経験者の海外志向や就業意識を調査した CIS 未経験者アンケートの調査結果に加え、CIS 実施直後に参加学生へ実施した実施後アンケートの回答を参照する。

実施後アンケートのアンケート項目に「CIS に参加して自分のどのようなところに自信が持てるようになったか」という問いを設定しており、この自由記述回答を参照した。進路調査アンケートで CIS の経験が進路検討に「非常に役立った」「一部役立った」と回答し、「海外志向の向上」にカテゴリ分類した理系学生 15 名の記述内容を抽出し分類した (図 9)。分類は語や文章記述の類似性、コンテキスト、記述全体の意味から同一概念を抽出し行った。ただし、自信の内容が複数含まれている回答もあり、それぞれカウントしている。

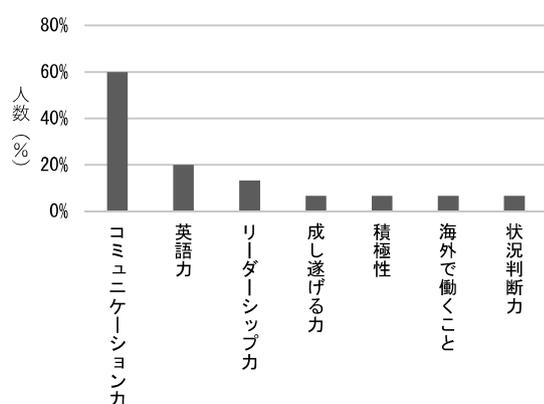


図9 CIS に参加して自分のどのようなところに自信が持てるようになったか。理系学生回答 (実施後アンケート)

その結果、「コミュニケーション力」が最も多く、次に「英語力」であった。本研修を通じ海外志向が向上した学生のうち、自己のコミュニケーション力や英語力に自信を得たと認識している学生が多いことがわかった。

本研修の活動は終始英語をはじめとする外国語で行われる。本研修は 2 週間合宿方式で実施され、学生は皆同じホテルに泊まり、寝食も共に行う。海外学生との長時間にわたる時間共有や人間関係構築のため、プログラム以外の時間も必然的にコミュニケーションが必要となる。そして、2 週間という制限された時間で課題に取り組み、研修最終日には受入企業へチームのプレゼンをしなければならないことから、海外学生とのコミュニケーションやディスカッションから逃げられない環境に置かれる。このような学生を取り巻く環境要因がコミュニケーションやディスカッションへの積極性を引き出していると考えられる。海外学生との膨大で多種多様なコミュニケーションやディスカッションを体験することでコミュニケーション力や英語力における自己効力感を高めたことがわかった。そしてコミュニケーション力や英語力の自己効力感が向上したことにより、不安が払拭され、それと共に海外志向が向上し、海外勤務のある企業やグローバル企業への就職を検討したと考える。

4.2.2 企業実習の経験が進路検討に与える影響

進路調査アンケートで「海外志向の向上」にカテゴリされた理系学生の記述回答を表 3 に示す。記述内容から、企業実習でグローバルに展開する日系ものづくり企業の様々な企業活動や社員の働く様子を実際に見たことにより、グローバル企業への興味や海外勤務への抵抗感の軽減に影響を与えたことがわかった。

就業経験のない学生にとって、実際の企業活動の現場や社員の業務内容等を理解することは容易ではない。また、外国人と共に活動した経験がない、または少ないこと (図 8) により海外勤務に対する不安や抵抗感が生じていたことから、企業実習の経験が海外志向向上に影響を与えたと考える。

表3 何がどのように進路検討に役立ったか。

理系学生回答 記述部分一部抜粋 (進路調査アンケート)

・海外インフラ事業に興味を持つきっかけとなった。
・海外で現地の人と協力して働くということに対してイメージがわき、海外勤務の可能性に対する抵抗感が軽減した。
・日本企業が世界を舞台に事業を行っていることを実感し、グローバルな企業への憧れが強くなった。
・発展途上国だと思っていた国の工場が日本と大差ないことを知り、また、街、人の発展の勢いを体感し、グローバル企業に就職しようと思った。

4.3 文系学生の進路検討への影響

4.3.1 自己理解の促進による進路検討への影響

進路調査アンケートで「何がどのように役立ったのか」の問いに対する文系学生の自由記述回答をカテゴリ分類した結果、「自己理解」が最も多かった(図2)。

表4 何がどのように進路検討に役立ったか。

文系学生回答 記述部分一部抜粋 (進路調査アンケート)

・現地スタッフや学生とコミュニケーションを取りながら課題解決することで、今後も専攻語を活かし参加国インドネシアとの関わりを持ち続けたいと思うきっかけの一つとなった。
・英語を使った仕事をしたいという気持ちが強くなった。
・海外の製造現場で起きている問題を直接現場の方からお聞きできるという部分が、課題解決のための選択肢を提示できる業界で働きたいという気持ちが強まった。
・現地学生が日本文化へ興味を持っていることを知り、日本のことをさらに外国人に伝えたいと思った。
・結局、自分はマスコミという道を選択したが、それはこのインターンシップを通じ、外国人労働者や日系企業、外資企業の経済活動について興味を持ったからであり、CIS参加の意義はかなり大きいものであった。

「自己理解」にカテゴリ分類された文系学生の記述回答(表4)から本研修における海外学生との活動、企業実習の経験が、自己の職業に対する興味や関心の高まりのきっかけとなっていたことがわかる。4.1でも述べた通り、文系学生は幅広い業種職種への就職が可能であることから、自己の興味や職業適性等を考え見つけなおす必要があることが結果の背景にあると考え

る(図3,4)。

次に、同じく「自己理解」にカテゴリ分類された文系学生の記述回答(表5)から本研修が、ものづくり企業への興味や就職希望を高めるきっかけとなっていたことがわかった。

表5 何がどのように進路検討に役立ったか。

文系学生回答 記述部分一部抜粋 (進路調査アンケート)

・工場実習がものづくりに興味を持つきっかけになった。
・日本のものづくりのレベルの高さを感じ、メーカーに興味を持つきっかけになった。
・工場ができて、雇用が生まれ、地域の経済が発展していく、その現場を見て、私も日本のメーカーに就職して将来は海外で働きたいと思った。
・参加前から当時はメーカー就職を希望していたが、その思いが強まった。

表6は進路調査アンケート回答者の就職先である。文系学生36名中、半数の18名が製造・メーカーに就職している。

表6 CIS参加学生(文系学生)の就職先
(進路調査アンケート)

進路先	文系(人数)
製造・メーカー	18
その他	10
金融	3
マスコミ	3
インフラ	1
進学	1

CIS未経験者アンケートの「ものづくり業界について知っているか」の問いに対する文系学生の回答(図10)を見ると、「あまり知らない」「全く知らない」が計16名(70%)と文系学生はものづくり業界に馴染みがないことがわかる。また、「ものづくり業界に興味があるか」の問いに対し、「とてもある」「ある」「少しある」と回答した学生は計14名(61%)であった(図11)。この結果から、本学の文系学生はものづくり業界に興味はあるものの、業界詳細については詳しく知らないことがわかった。

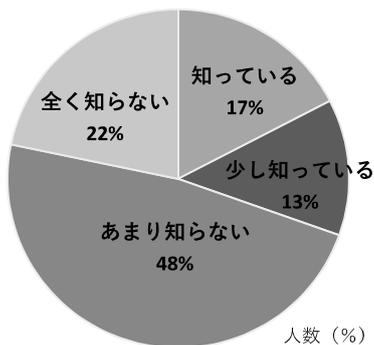


図10 ものづくり業界について知っているか。
文系学生回答 (GIS 未経験者アンケート)

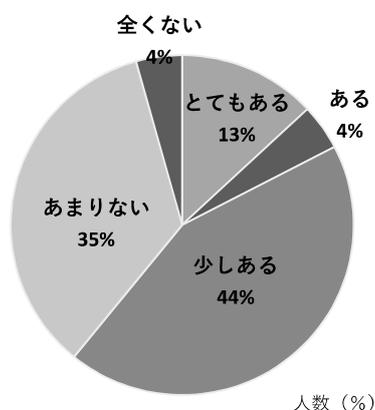


図11 ものづくり業界に興味があるか。
文系学生回答 (GIS 未経験者アンケート)

文系学生は、理系学生に比べてものづくり業界の詳細を知る機会が少なく、その業界に属する企業の活動を具体的にイメージできないために、馴染みが少ないと思われる。本研修に参加するほとんどの文系学生にとって、実際に工場に入り製造から出荷までの過程を間近に見たり、そこで働く様々な役職の社員との交流は初めての経験である。加えて、本研修の課題取り組みのため、受入企業についての総括的な理解が求められる。これまで未知の業界であったものづくり業界、グローバルに展開する日系ものづくり企業の様々な企業活動、日本の高度な技術力を間近で体験し知見を得たこと、インタビュー等を通じ、ものづくり企業で働く社員から話を聞いたり、働く姿を見たことが、ものづくり業界やものづくり企業の理解を深めたり関心を高めたと考える。

4.3.2 就業・職業意識の変容による進路検討への影響

進路調査アンケートで文系学生の進路検討に役立った項目として次に多かった項目は「就業・職業意識の変容」であった(図2)。記述回答(表7)から社員との交流や、職場や社員の働く様子を実際に見たことにより、仕事や働くことの具体的なイメージ形成ができたことがわかった。

表7 何がどのように進路検討に役立ったか。

文系学生回答 記述部分一部抜粋 (進路調査アンケート)

・普段の生活では会うことすらない駐在社員さんと昼ごはんを食べながら気軽に話せる機会を得たことで刺激を得たり、就職についての具体的なイメージを少し持つことができた。
・「海外で、違う国の方々と共に働くこと」を体感したことが、自分が外資系企業で働きたいのか、国内企業で海外に出たいのか、ものづくりの営業がしたいのか、等具体的にイメージが付き、自分がやりたいことを明確にして就職活動を行えた。
・企業組織の内部のイメージ(海外駐在)が持てた。
・仕事についてのイメージを持つことが出来た。
・海外で働くことの大変さを知れた。
・就職に対して漠然としたイメージしかなかったが、実際に働いている社員の方を拝見して、自分が働くイメージを持てた。

就業経験のない文系学生にとって、同じく就業経験のない理系学生と同様に、仕事や働くことに対し想像レベルでしか理解できなかったことが企業実習を通じ現実として具体的に理解したということがわかる。仕事や働く事の具体的なイメージを形成できたことが学生の就業意識や職業意識の涵養に繋がったと考えられる。

尚、表 3,4,5,7 で参照している自由記述については令和2年度報告書に記載を予定している。

5 まとめと今後の課題

本稿では、本研修の経験が参加学生の進路検討へ与える影響の有無、影響の種類、影響要因を検証・考察し、参加学生の進路検討へ与える効果を明らかにすることを目的とし検討を行った。調査・検討結果から本研修の経験が文理学生共に進路検討へ効果的な影響を与えたことがわかった。最も大きな影響の種類は、文理で違った傾向があり、理系学生は「海外志向の向上」、

文系学生は「自己理解」であった。文理学生の進路検討に与えた最も大きな影響の種類が異なる要因として、専門性による進路の明確度の違いが背景にあると考えられる。他方、別の視点で見ると、文系学生は主に「学部生」、理系学生は「大学院生」という参加学生の属性の相違が一つの要因とも想定できる。本稿では文系学生と理系学生の差異に着目していることから、学部生と大学院生を基準とした影響の差異については今後の分析課題としたい。

理系学生の海外志向の向上の大きな要因として、これまで経験したことのないほどの膨大な英語や外国語を使ったコミュニケーションを経験したことにより、外国人とのコミュニケーションや英語力における自己効力感が向上したことが理解できた。そして、海外の日系ものづくり企業の活動現場やそこで働く人々の働く様子を実際に見たことで、グローバル企業への興味が高まり、また海外勤務に対する抵抗感が軽減したことがわかった。この海外志向の向上が海外勤務のある企業やグローバル企業への就職を検討・志望する後押しとなったことが理解できた。

文系学生にとっては、本研修が自己の仕事に対する興味や関心、職業適性の認識等の自己理解を深める契機となったことが分かった。そして、ものづくり企業で研修し様々な知見を得たことで、これまで具体的に知ることのなかったものづくり業界への理解促進や興味を喚起し、進路選択肢の拡大や進路が明確化したことがわかった。また、実際に職場に入り、社員が働く様子を見たことにより仕事や働くことの具体的なイメー

ジが形成され就業・職業意識が涵養されたことが理解できた。

最後に、今回は進路調査アンケート、CIS 未経験者アンケート、実施後アンケートのデータをもとに効果検討を行ったが、今後は、検討結果の信頼性を高めていく必要がある。そのため、同一対象の縦断的調査データの取得、本研修のコンテンツと参加学生の進路検討に与える影響の相関分析、対象サンプル数を増やすため中長期にわたるデータ取得が課題であると考えられる。

謝辞

本研修を賛助してくださっている文部科学省、各受入企業の皆様、大学関係者の皆様に感謝の意を表す。

注

- [1] カップリング・インターンシップ全体概要は以下に詳細を記載している。勝又美穂子,橋本智恵.(2019). 文理融合実践型研修における文理学生の認識比較調査, グローバル人材育成教育研究第 7 巻 2 号 pp14-21

引用・参考文献

- 1) 勝又美穂子.(2018年8月). カップリング・インターンシップ, グローバル人材育成学会第4回北海道支部大会予稿集 pp.22-23, 北海道情報大学
- 2) 勝又美穂子,橋本智恵.(2019). 文理融合実践型研修における文理学生の認識比較調査, グローバル人材育成教育研究第7巻2号 pp.14-21

受付日 2021年1月8日、受理日 2021年3月13日